

くろっけ

平成六年七月二十七日第三種郵便物認可
平成二十年十一月一日発行（毎月一回一日発行）
第十五卷第七号（通巻第一七五号）

鈴



くろっけ

俳句雑誌

GLOCKE

第175号

11. 2008

日の丸弁当

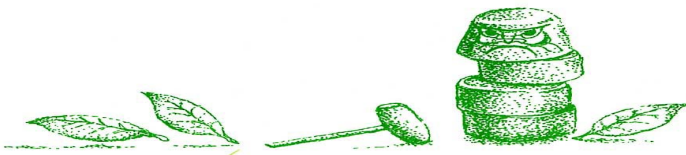
品川 鈴子

正・副社長そつくり双子男郎花

黄落を誘ふ婚の紙ふぶき

牛^{いのこずち}膝こぼる地下駅永田町

ルビーかと句坐に廻さるさねかづら



悪たれの浄瑠璃語りつつ秋思

阿波木偶につむじ撫でらる文化の日

新米の日の丸弁当幕間に

高靴を控く団栗登城坂

キャリアにも木の実降り込む二の丸址

投げ巻きのスカーフ止めに草虱



玉

鈴

吟

大阪 奥田 妙子

近江水郷舟影もなく葭茂る
遊船の人待ち顔の舟着き場
金蠅が御所山道に屯する
八幡堀 俄 役者の顔 涼し
「暑いわね」交わす言葉は皆同じ

東京 片野 光子

駅極暑切符はポニヨの袋入り
並べられ 宿 浴衣 選る 旅心
持て成さる茶店の庭に蚊遣り豚
地下鉄の車内に続く朝顔市
フォルテよりピアノニツシモへ蟬時雨

兵庫 勝野 薫

墓鴉 供華の鬼灯かつ攫ふ
秋芽吹く朽倒木に沢の風
種多き玫瑰の実の甘酸つば
新涼の窓開け放つ遺品部屋
ジャズドラム日焼の少女掬自在

兵庫 金田美恵子

身に入むや刃の一字義士の墓
花木権四十七士の墓並ぶ
色かえぬ松は大名名残りなり
興亡を映せる濠の水澄めり
リハビリは息継ぎ井戸まで秋うらら

兵庫 唐鎌光太郎

霊園の遠く町見ゆ雲の峰
氷菓子輸送トラック降りし人
早起き会とて集まりし朝登山
片蔭を繋ぐ道順ひと思案
店涼し徳利に小鉢磨かれて

兵庫 川合まさお

庭石は堆積岩やねぢれ花
ふはふはと花藻ひろがる隠れ沼
七夕の小笹括りし乳母車
「安全」が目につく駅の星祭
遠雷や旧家の床几揚げしまま

大阪 河村 泰子

ヴオーリズの像に飛びかふ燕の子
白壁と船板扉に処暑の風
青近江村雲御所より見下ろせり
門跡の尼は留守なり余花の雨
棚経に雑じりをさなご手を合はす

東京 岸 はじめ

死者生者寄り添ふ部屋に雷激し
蝸や白檀の香の柩まで
柩打つ釘の響けり残暑なほ
そばだつる耳の後を秋の声
父と子の寡黙を競ふ秋灯下

東京 北川とも子

炎屋の音失ひし交又点
棟梁の屈託のなき三尺寝
うつつには戻りたくなし昼寝覚
火取虫ひと夜限りを狂ひけり
ひまはり重し退院の夕暮に

東京 北畠 明子

たちまちに乾く打水蕎麦処
大き影落とし日盛り何の鳥
「今夜蛍光ります」と貼る路地の家
噴水も眠つてをりぬ夜の底
ピント合はず間にかはせみの飛び立ちぬ

兵庫 木原 今女

入船の汽笛に棧橋明け易し
夕立に子等喚声と駆もどる
夏休みマンホールの蓋絵日記に
で虫を葉裏に逃がし休み果つ
新涼や下駄の裏打ちとれかゝる

兵庫 木村 美猫

一善に手を合はさるる今朝の秋
コスモスの私鉄沿線我が街よ
源氏説くやはらかき声秋裕
片隅に舞台女優の声さやか
野紺菊ダム湖に眠る幼年期

愛媛 久保田由布

脱藩の峰雲が立つ土佐境
牛鳴いて子別れ鳥おし黙る
鳥の子ガードレールに行き昏れて
植糸もせぬ高砂百合が庭に咲く
こころ弱き葉が萎しおれたり蓮畑

兵庫 藏元博美

君と聞く雷さまの大ドラム
紅き蘭一輪散れり妻の前
飛び込みし蝉鳴きいだす台所
真夜中の風呂で聞きいる杜鵑
馬手に箆弓手に携帯独り酒

薬草歳時記

(二七四) アシ(葦、蘆根)

三輪慶子

蘆の花舟あやつれば水匂ふ

山口 誓子

葦といえはこの日本国豊葦原瑞穂国の開国の頃の景色が思われます。水のある所、稲作に適したところは一面の葦に覆われていたのでしょう。その葦原を拓いて稲田を広げていった古代人の労働、今の休耕田の有様からもその大変さが偲べれます。

先日舟で牛久沼を回りました時に掲句の感覚をそのまま体験しました。昔は沼の浅瀬に葦等を土台にして浮田を作っていたようですが、台風のために流される憂き目に遭ったようです。

アシはイネ科、ヨシ属の多年草。世界中に広く分布しています。「悪し」ということを嫌ってヨシとも言われ、特に日本の暮らしに深く関わってきました。そのアシの根茎に薬効があります。秋から冬の寒い時期に根を掘り上げ、きれいに洗って輪切りにして干します。干したものを三十倍ぐらいの水で煎じてお茶代わりに飲みますと、利尿作用

がありむくみを取ります。腎臓機能を強化し消化不良、黄疸にも良くて、体内の浄化をするということです。薬理は分かりませんがペントサン、アスパラギン、ビタミン類、セルロース等を含みます。ところがこの浄化作用は人間の体内にとどまらず、アシの根際の水を浄化するというのです。今やアシは水質保全の担い手として注目されています。単に葦だけで秋季ともしますが、他に葦の花、葦の穂絮、葦原、葦の秋、芦刈と秋の季語が続きます。他季では葦の角、青葦、枯葦、と言うように季節をうつす葦の姿。豊葦原の現在では薬効はともかく頼もしい句材です。

「芦刈」というお能がありますが、ご覧になりましたか。今昔物語から取られた趣深いものです。生まれの卑しからぬ夫婦だけれど、どうも暮らし向きが良くならない、いつそ一人一人になって暮らしを立て直そうと、いったん別れます。女は京に出てさる御方の乳母になり、元の男を捜して難波の御津の浜を訪れます。男はうまうまいかななくて葦を刈って暮らしを立てている。それと知った女が葦を求め、再会します。お能ではめでたく終わるのですが、物語では厳しい結末です。

葦の工芸製品も数々あり、葦は日本の文化に深く関わってきたと思いつたことでした。

参考文献 「薬草」山と溪谷社

「薬草カラー図鑑」主婦の友社

著者略歴神戸薬科大学卒

アシ (ヨシ) (ヨシ属) (いね科)

花期：8月～10月

Phragmites communis Trin.

(草) (中) 蘆

薬用部分

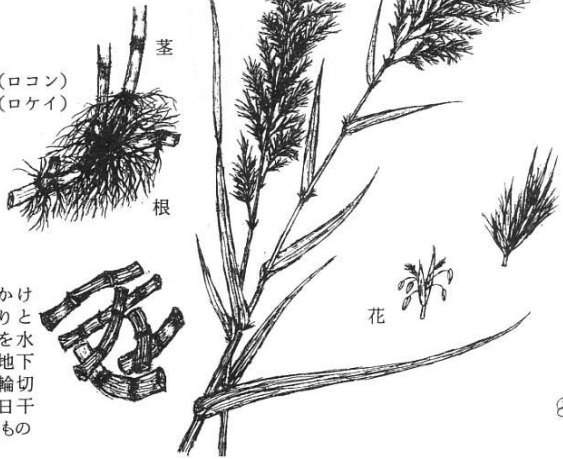
根茎：蘆根(ロコン)

茎：蘆茎(ロケイ)

須賀

悦子画

秋～冬にかりけ
根茎を掘りとり
ひげ根を水下
洗いし、地下
茎も共に輪切
りにして日干
し乾燥したもの



花穂
(多数の小穂からなる
大型の円すい花序)

小穂
(五個の花からなる)

E.S.

浦安の子は裸なり蘆の花	高浜 虚子
舟ゆけば筑波したがふ蘆の花	富安 風生
蘆の花近寄るほどに高くなる	右城 暮石
蘆の穂に家の灯つづる野末かな	富田 木歩
穂絮ゆく地の息天の息をうけ	平畑 静塔
かたまりて露の穂絮やけふ飛ばん	石田 波郷
天地をひらくが如く葭刈れり	野沢 節子
蘆の花おのが光に暮れゆけり	沢木 欣一
追ひて来し人見失ふ蘆の花	中村 苑子
海の辺に垣根のごとき葦の花	* 片野 光子

*は「くろつけ」

鈴の奏

品川鈴子選

落雷にダックスフント匍匐なる
岡山 岡 敏恵

まず半分父から子への初ビール
躊躇ひのなくては切れぬ大西瓜
医学舎に実習の灯や夏の月
蝉しぐれ故郷の家閉じられて
兵庫 櫻木 道代

赤のまま綾取りの糸すぐ解け
墳丘に灼くる埴輪の海を向く
蛸や温暖化のとき疑わず
國生みの島書割の大夕焼
兵庫 鈴木 愛子

鬼灯も点す娘の霊供棚
大切な者みな奪ひ夏ゆけり
浜に座す若き二人に晩夏光
はまなすのアイスクリームつられ買い
神奈川 八張 さち

蝦夷からのタラップを下り熱帯夜
北の浜朝はウニ漁の旗が立つ
浜梨のむこうに霞むオホーック海
夏休み兄の薦めし文庫本
香川 横内かよこ

ビアホール喉鳴らすにも上手い下手
アイスティ身の上相談ばかり受け
ソーダ水イヤフォン分かち恋のうた
潔癖性らしく夏炉の灰均す
愛媛 伊藤 康子

夏炉端俳句談議に終りなし
古民家の板の間涼し雨宿り
炎昼に身動きもせず風見鶏
よたよたと飛び白壁に大ばつた
兵庫 中村 紘

病める蝉這ひゆく先は木の根つ子
客を待つごとく寄り来る畑の蚊
夕立風笛はらひつつ芭蕉句碑
麻畑 国民学校理科授業
東京 遠藤とも子

焼酎を買へどもよき梅手に入らず
懇親会ことしの梅酒振舞はる
雷神の足音とどろひとしきり
蝉しぐれ止むとき停る時間かな
兵庫 中村 碧泉

磯笛の澄みし音色に秋兆す

秀 鈴 記

躊躇ひのなくては切れぬ大西瓜 岡 敏恵

かつては子沢山で井戸や流水に冷やした西瓜玉を切るのが楽しみだった。核家族の当節では四半分の切売りやミニ西瓜なども売れ筋だろうか。

たまに扱う大西瓜はよく熟れていれば、皆の視線を集めて一刀両断の瞬間、刃先の皮がバリッと裂けて赤や黄が鮮やかに覗くのが醍醐味。大物との真剣勝負だから躊躇や緊張感が昂まり、さすがに美味しい筈。

赤のまま綾取りの糸すぐ解け 櫻木 道代

赤のままは蓼科の野草で、赤い小粒の花穂をしごきままたごとの赤飯に見立てる。綾取りも幼い遊びで、輪にした糸を左右の手首や指に掛けて、川、梯子、鼓、などの形を作るが、複雑に絡めた糸は纏れずにさらりと解けるので、飽きませず次々と形を変える。小さな指先を器用に使う練習と、その形を何かになぞらえて空想力を養う。糸一本の魔法。

巻頭 三句 品川 鈴子 評
四句〜十五句 藤田かもめ //

*選句は全て 品川鈴子

大切な者みな奪ひ夏ゆけり 鈴木 愛子

何不自由ない境涯も、無常の風は避けられないもの。頼母しい夫を失い忌明けからどれほど経たない裡に、精霊棚は逆縁の娘に鬼灯で華やがせる母心。大伴家持の歌の通り何より大切な家族をみな奪われたとは。悲嘆は詞にならない深さ。俳句がせめてもの支えになりますよう。

蝦夷からのタラップを下り熱帯夜 八張 さち

避暑旅行の北海道から戻つての実感。ニュースや天気予報でもお馴染みの「熱帯夜」は最低気温が二十五度以上の夜のこと。暑くて寝苦しい。作者はもう少し北海道に居りたかったのかも知れない。

ピアホール喉鳴らすにも上手い下手 横内かよこ

「喉越しのいいビール」という言葉は聞いたことがあるが、「喉鳴らす」とは「言い得て妙」。触覚の聴覚化と言うと大袈裟だが、これも一種の連想飛躍か。

それに、いわゆる「独り酒」でなく、「ビアホール」という設定が面白い。これによって、下五が生きてくる。

炎昼に身動きもせず風見鶏

伊藤 康子

「炎昼」は炎天の「炎」と昼間の「昼」からできた言葉で、山口誓子が昭和十三年刊行の句集名に「炎昼」を使って以来、広まったという。意味としては「日盛」と大差はないが「炎」という字の激しさと語感の強さが印象深い。掲句の中七、言外に「風一つない」ことを示している。

よたよたと飛び白壁に大ばった

中村 紘

「蟻ばった」はバッタ科の虫の総称。代表種は、「殿様ばった」と「精霊ばった」。「殿様ばった」は、群れ密度が高まり、食物の供給が繁殖の速度に追い付かなくなると、大群ばったをつくって大移動する。これが「飛蝗ばった」の字の源。

掲句の「大ばった」は恐らく「飢えた殿様ばった」。

懇親会ことしの梅酒振舞はる

遠藤とも子

「梅酒」は実梅に焼酎・氷砂糖を加えて作る。そうすると、盛夏の頃には琥珀色になり、よい風味を帯びてくる。梅酒に氷を浮かべて飲むと極上の清涼飲料になる。上記の懇親会は、振舞いの梅酒に、さぞ座が弾んだことだろう。

磯笛の澄みし音色に秋兆す

中村 碧泉

「磯笛」は海女が水中での作業を終え浮上したときの呼吸音。口笛のように聞こえる。いわゆる「秋の声」は、秋になって耳にする風雨の音、木の葉のそよぎ、虫の声などの総称で寂寥感を伴うが、「磯笛」の音色は鋭く、高揚感がある。

金魚玉祇園小路を曲りけり

有本 勝

金魚玉は金魚を飼うガラス製の球形の器。その中に入っている金魚の種類、金魚玉を持っている人は誰か、作者は一切語らない。祇園小路という地名から、想像して下さいと言わんばかりである。鑑賞の余地のある作品。